



# 瓦礫の夏

10月10日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 10月10日のおはなし「瓦礫の夏」

階段のところに腰掛けて、麦わら帽子の少年は草笛を吹いていた。

風に乗って草笛の音が流れる。暑い夏の日のおだるような熱気の中、その調べだけがすいすいと軽やかに駆け抜けていく。少年の座っている階段はもともと大きな建物の正面階段だった。いまその建物は正面の一部分だけを残してあとは完全に瓦礫の山となっている。階段を上りきったところに石造りの壁面が二階の高さぐらいまで残っているが、ぽっかりあいた入り口や窓からは夏の青空が見えている。壁一枚だけが立っている。向こうには何も無いのだ。

君は荷物を下ろしてその場に立ち止まる。かつて賑やかな通りだったらしいその場所に。焼けこげのにおい、多くの建物が崩壊したため街全体を覆っているほこりくさいにおいにまざり、腐り始めた遺体のにおいがする。何日もろくに食べておらず腹ぺこのはずだが食欲もない。久しぶりにぐっすり寝たはずなのに疲労が去らない。何かを目指しているはずなのに、それがどこなのかわからない。自分がどこから来てどこへ行こうとしているのか、そもそも何者なのか、何もわからない。

「教えてくれないか」麦わら帽子の少年に声をかける。少年はちらと視線を送って寄越すが、草笛を吹くのをやめようとしなない。変わらぬ様子で同じ曲を繰り返し吹いている。でもそれを見て特に腹が立つわけでもない。そういうものだ、と君は思っている。きっと君はここではよそ者で、それも取るに足らないよそ者で、いちいち相手なんかしてられないのだろう。根気よく、答えてもらえるまで、何度でも頼むしかあるまい。「ここがどこか教えてくれ」

少年は立ち上がり、草笛を吹きながら階段を、とんとんと下りてきて、階段下に立つ君よりも二段ほど上で立ち止まり、不意に右脚を高く上げると君の胸を蹴る。悪意を込めたという風でもない。力任せという風でもない。ただ軽くぽーんと、突き放すように君の胸を蹴る。君は笑ってしまうくらいあっけなくもんどりうって後ろに倒れる。背負っていた背囊のおかげで頭こそ打たなかったが、その代わり背筋を何か固いものに押しつけて痛めてしまう。

石畳の上にあお向けになった君の目に、夏空がただいやになるほどまぶしく、その青の手前を煙が流れていく。町を焼いた煙が幾筋も。いまは炭になった街路樹の枝先が見える。そのとき不意に思い出す。君はもちろん兵隊で、命じられるまま戦場に赴いて、命じられるまま戦ってきたことを。とりわけ優秀でも勇猛でもなかったが、正確な射撃で敵兵を倒し、忠実に役目を果たすことで戦友の信頼を得、何よりも生き延びて、生き延びて、最後の最後まで兵力として文字通り死力を尽くしてきたのだった。

自分はよき兵士だった。と君は思う。ずば抜けて、とは言わないが、部下にひとりはいて欲しいと思われるような信頼のおけるいい兵士だったと。そしていま君は夏空の下、少年に蹴り倒されてあお向けに横たわっている。怒りも憎しみもない軽いひと蹴りで横転している。ひっくり返された亀よろしく、起きあがれずにいる。そのとき停まっていた草笛が鳴り始め、その痛切な音に君は頭をもたげる。少年はしゃくり上げ涙を流しながら、でも表情のない目つきで草笛を吹き続けている。それを見て君も涙を流す。

たくさんのものが失われてしまったんだ。たくさんの。あまりにもたくさんのものが。そしてその時になって初めて君は気がつく。その街がよく知った街だったことを。子どものころから住み慣れた街だったことを。その建物も、その石畳も、その通りも、その街路樹も、その夏空も、そのメロディーも、その草笛の吹き方も。気がつくとき麦わら帽子の少年はもういない。少年はもう、君の中に帰ってきたのだ。

(「麦わら帽子の少年」 ordered by オネエ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ほくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 瓦礫の夏

<http://p.booklog.jp/book/35125>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35125>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35125>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.